

CONTENTS

COMBAT

2016.Nov.
No.488

11

Cover Design
Favorite Graphics Inc.
Cover Photo HIRO SOGA
©WORLD PHOTO PRESS 2016
※本文中の価格は消費税込みの
総額表示です。



006

【第1特集/M4】

M4 NEXT GENERATION 制式採用モデルから クローンまで総ざらい!

- 008 米軍とM4
- 010 米M4事情
- 018 M4マニアックス
- 030 タブロイズ!
- 032 THE CHRONICLE
M16から始まったファミリーの歴史
- 038 M4エアソフトガンカタログ

【第2特集/シューティング】

067

シューターに学ぶ技と心

The Portraits of Combat Shooters

- 068 シューターたちの肖像
JSC / JANPS / UNLIMITED / APS
- 078 三等兵、世界最強シューターに
スピードシューティングを学ぶ!
- 080 TOMO&ISHIIが語る
イチロー-GUN団の真実
- 084 アメリカでシューターとして生きていくには

【第3特集/ミリタリー】

046

RIMPAK2016

- 052 ニッポンの力こぶ RIMPAK海自編
- 056 富士総合火力演習2016
- 058 陸上自衛隊誕生60年 後編



004

COMBAT FRONT LINE

088

The Equipments of the U.S. Force
[現用米軍装備カタログ]
第144回Crye Precision特集Part.3
●解説:松原隆 ●撮影:山崎 学

098

東京マルイ
KSG ●Photos&Text by Taku

106

WESTERN ARMS
COLT MkIV SERIES'70
ULTIMATE COLLECTION
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY

111

WESTERN ARMS
WA MOVIE GUN SERIES
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY

116

サバゲ三等兵 ●by 織本知之

117

Militaria Roundup!
帝国日本陸軍の軍服と装備 Part.3
●解説:菊月俊之

128

PRESENT

146

WANCHER'S STYLE ●織本知之

148

兵装嗜癖 ●by fujiwara

150

Goods & Accessory

154

PROJECT NINJA ●morizo(東京装備BAKA)

158

NEW GENERATION STYLER ●fujiwara

170

トイガンニュース

- 170 WA プロダクション・シリーズ
- 173 タナカ 九四式自動拳銃《前期型HW》
- 174 タナカ コルト・パイソン .357マグナム4インチ
《"Rモデル"ニッケル・フィニッシュ》
- 175 タナカ S&W M29 61/2インチ・カウターボード
《"ダーティ・ハリー"モデル"SJフィニッシュ》

210

編集部お薦めのタクティカルギア大図鑑
Tasmanian Tiger CHEST RIG MODULAR/
CHEST RIG MKII G36

212

サバゲ三等兵 ●by 織本知之

216

中田商店グッズ

218

S&Grafグッズ

129

GAME OVER THE TOP

132

サバゲ三等兵APS編 対決!&ザ弾会

138

射撃のススメ

140

トイガンズ・ジャンクション

186

US SHOOTING LIFE

188

編集長日誌

190

ブラックホール

191

SWAT 新作オリジナルTシャツ

193

バックナンバーリスト

194

ミリタリー・コレクション

196

レア・ミリタリー・コレクション

198

A STITCH IN TIME

199

ヘンリー少年のミリ雑講義

200

狩野健一郎のシネマ放浪記

201

狩野健一郎の新作DVD紹介

202

蛙のゆびさき

204

戦車兵通信 WORLD OF TANKS

206

コンバットマガジン・インフォメーション・センター

207

読者プレゼント応募方法

208

編集後記



制式採用モデルから
クローンまで総ざらい!

M4 NEXT GENERATION

世界を代表するカービン銃、M4。米軍制式採用モデルから、さまざまなメーカーによるクローンモデルまで、そのファミリーはあらゆる場所で、さまざまな状況で使われてきている。今回は「一族」の総ざらいとともに、歴史と、実際に使われている現場を紹介。彼らのありさまを通して「世界の流れ」と「これから」を読みとることができる銃。それがM4だ。

M4事情

M4カービンというのは、1994年にアメリカ陸軍に制式採用されたカービン銃(短銃身モデル)である。

10年ほど前までは数えるほどしかなかったこのM4スタイルライフルの製造会社も、現在ではありとあらゆる会社で造りたおされているといっても過言ではない状況になっている。このあたりのアメリカ事情を紹介しよう。

●Photos & Text: Hiro Soga



M16A2コマンドのフルオート射撃。そのサイクルは、約1000発/分と速く、リコイルもかなりのものだが、ジェイソンは完全にコントロールしている。

M4 & AR-15

言うまでも無く、ほとんどのアメリカ人はM4最良である。

先のイラク/アフガンでの戦争を立派に戦い抜き、それこそバトルブーフされた軍用制式銃というM4カービンのバックグラウンドは、アメリカンにとっての誇りともなっている。そのライフル版初期モデルであるM16がミリタリーに制式採用された1964年以降、様々なモデルチェンジや紆余曲折を経て、ここに来て現代戦でも立派に通用するというのが証明されたことになる。

このようにM4を褒めると、必ず出てくるのがAK47を念頭に置いた反対意見である。

曰く、

- 5.56 x 45mmはストップパワーに劣り、威力不足である。
- ジャムが多い。
- チャージングハンドルの位置が悪く、

類付けしたままでは操作できない。

●アルミボディは強度に問題がある。という、バトルブーフされたライフルに対する意見にしては、少々説得力に欠けるといわざるを得ない。好みの問題といわれても、強く反論できない気がしなくもない。

今回M4を取材するに当たり、米アーケディアPD (ポリスデパートメント) のサージェント (巡査部長)、ジェイソン・デイヴィスに協力してもらった。というのも、アーケディアPDのパトロールカーには、必ずColt社のLE6920という、いわばM4のセミオートバージョンが装備されており、中でも彼が特別に使っているのがなんと、M16A2コマンドのセレクター付き、つまりフルオート仕様だということを知っていたからである。ジェイソンは、全米に7人しかいない“コルトアーマラー”であり、LE (ロウエンフォースメント：法執行機関) 部門の訓練/講義における責任者なのだ。

「M4カービンだね。M4/ARプラットフォームも、ここ10年くらいに環境が大きく変わってきている。M4カービン (M4A1) というのは、基本的にUSミリタリーで制式配備されている、コルト社製14.5inch (約368mm) 銃身の、セレクター付きモデルのことだ。つまり一般人は基本的に所有できない (銃身長は16inch以上必要、フルオート仕様は特別なライセンスが必要) モデルだね。

セミオートオンリーのシビリアンモデルは、AR-15というカテゴリーに入るから、この呼び名の方が一般的とい

JASON DAVIS

ジェイソンデイヴィス
アーケディアPD
SWATスナイパー。
射撃教官、コルト
アーマラーと多彩
な顔を持つ。デュー
ティガンは、コ
ルト1911だ。



M4 マネ アツクス



“M4A1”——米軍のプライマリーウェポンとして、君臨する進化型アサルトライフル。

1994年の採用から20年以上の長きに渡り、常に第一線にある。細かな仕様変更や改良を加えながら、進化し続ける戦闘銃。その実力と魅力を探る。

●Photos & Text: Tomo Hasegawa

M4A1というライフル

“M4A1”はUSミタリーのプライマリーウェポンとして制式採用されているアサルトライフルだ。

1990年代、M16シリーズの大きな特徴だったキャリングハンドルを無くし、代わりにピカティニレールを装備した“フラットトップ”仕様へ転換。ライフルスコープやダットサイト、ナイトビジョンやサーマルビジョンなどの各種照準器システムを容易に装着できるようになった。

これによりベトナム戦争時代にルーツを持つ戦闘銃が、現代戦への対応力が一気に高まった。シンプルなアイデアだが、戦闘銃として劇的な進化を実現してみせたのだった。

変幻自在の機能性

フラットトップ化という画期的な進化に、細部の改良を加え「M4/M4A1」として制式採用となったのは1994年といわれている。すでに20年以上経過するが、今もお現場の意見を元にインプルーブ（改良）を重ね、M4には数多くの試作モデルや異なるバージョンが存在する。新型銃が登場するたびに「いよいよ世代交代か……」という噂が出るものの、M4への信頼性はまだまだ揺るぎないどころか、強まる一方である。

そういえば1960年のM16採用当初すぐに「ボルトフォワードアシスト」

米軍が制式採用するM4カービン（M4A1）。コルト社以外に数多くのメーカーで同タイプのアサルトライフルが製造されている。それぞれ名称が異なるが、“M4”または“AR15”という通称で呼ばれている。2012年に最後の特許が失効し、さらに多くのメーカーからM4タイプが登場。オリジナルであるコルト製を凌駕する性能を備えていたり、特殊部隊に部分採用されていた。写真はアメリカ“ノヴェスキー”社製M4モデル。命中精度と作動性に優れた1挺として好評だ。



1 新生“FN M4”。昨年、M4の製造がオリジナルであるコルト社から、FNアメリカ社へ変更された。剛健な印象で快調な撃ち味も良い。ナイターアーマメント社製R.I.S.付きのM.W.S.（モジュラーウェポンシステム）として納入されている。2 可倒式のリアサイト。3 ロングバレルに長いR.I.S.を装備したFN15/M16。これも米軍に制式採用されている。



RIMPAC 16

写真 菊池雅之

参加国26カ国。参加艦艇50隻。世界最大級の軍事演習となった「リムパック16」。ここでは、日本以外の参加国の模様を紹介していく。太平洋の安全保障に欠かせない存在となり、肥大し続ける。これが「リムパック」だ！



世界最大規模の大演習「リムパック」

環太平洋合同演習「リムパック」。2年に一度ハワイ周辺海域及びサンディエゴ沖で行なわれている世界最大規模の演習だ。RIM of Pacific(環太平洋)を略してRIMPACとしている。「リムパック16」は、年6月30日から8月4日にかけて行なわれた。

先月号の『ニッポンのちからこぶ自衛隊』において、「リムパック16」に参加した陸上自衛隊を中心にお伝えした。陸上自衛隊は前回の「リムパック14」から正式参加している。

もともと「リムパック」は海軍演習

であった。だが、米軍をはじめ、諸外国軍において、陸海空海兵隊の統合運用がスタンダード化しており、それを受けて、「リムパック」も海軍演習から統合演習へと大きく様変わりした。

自衛隊も例外なく、統合運用化を受けて、陸自部隊が参加するようになったのだ。白羽の矢が立ったのはもちろん西部方面普通科連隊だ。海自の輸送艦や空自の輸送機などで日本の島嶼部へと進出する、まさに統合運用の代表ともいえる部隊である。同部隊を拡大改編した日本版海兵隊とも言える水陸

機動団の創設が間近に控えており、まさに脂ののっている時期と言える。

リムパック16の参加国は26カ国を数えた。

1971年にアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスの5カ国間演習として始まっており、回を重ねるごとに、参加国は増えていった事になる。

そこで今回は、「リムパック16」演習をクローズアップ。このページでは特に日本以外の参加国についてご紹介しようと思う。



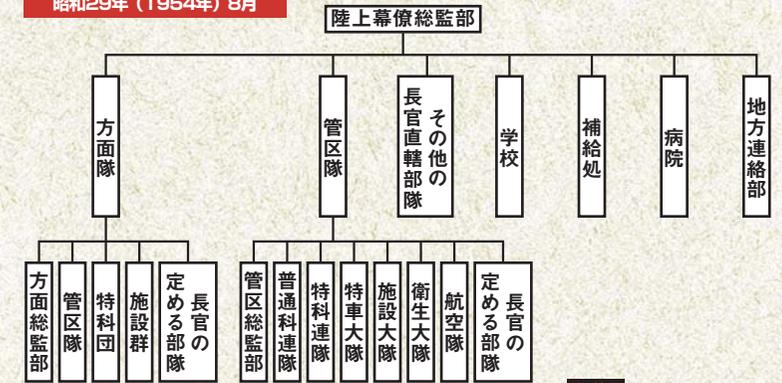
陸上自衛隊
いまとむかし
Now
and
Then

陸上自衛隊 誕生60年

後編

国内の治安を任務とした警察予備隊と保安隊は、日本の防衛力を強化するため陸上自衛隊へと発展した。その誕生までの経緯と昭和の陸上自衛隊のユニフォームと装備を紹介する。

陸上自衛隊組織図 昭和29年(1954年)8月



陸上自衛隊部隊配置 昭和33年(1958)3月

陸上自衛隊は、保安隊時代の4管区隊制から防衛力強化のため北海道から九州までのエリアを6管区隊制へと部隊を拡大した。この際、方面隊は、当時ソビエトを警戒するため、北海道に北部方面隊1個が置かれている。管区隊は現在の師団にあたり、総監部を司令部として、連隊などが配置されていた。



興が始まったばかりであった。一方、日本を取り巻く政治情勢は、極東におけるソビエト連邦の脅威だけでなく、インドシナ戦争、朝鮮戦争、中国と台湾の対立などで不安定な情勢が続いていた。そのような状況の中、講和条約と共に締結した日米安線保障条約(以下、日米安保条約)に基づく駐留米軍の減少などもあり、アメリカは極東の安定化を日本政府に対して自衛防衛力の強化を求めていた。

当時の吉田茂首相は、この求めに対し、自衛力の急増は政府の財政負担を大きくするだけでなく、日本経済にも負担をもたらすと考えており、アメリカの要求を簡単に受け入れるわけにはいかなかった。しかし、冒頭のダレス国務長官の表明したMSA援助の経済的支援は、戦後の復興を目指す日本にとって魅力ある援助に違いなく、政府内ではこの援助を受け入れるかの議論が始まる。

日本側がまず、問題としたのはMSA援助

の受け入れ条件として規定されていた一つに「軍事的義務の履行」があり、これが日米安保条約で定める範囲と異なれば、憲法を含めた問題になる事であった。さらに、日本がMSA援助受け入れに動いた事から、アメリカは日本の陸上自衛力を11万名(昭和28年8月現在の制服職員)から10個師団編成の32万5,000名の増強を提案してきた事である。吉田首相は、これらの問題を含め内閣や野党との協議を重ね、MSA援助の受け入れを昭和28年9月に決定し、アメリカとの折衝段階へと進んだ。

アメリカとの交渉は同年10月に始まり、「軍事的義務の履行」は日米安保条約の範囲内である事を確認し、自衛力の増強は、3か年計画で10個師団18万名にする日本側の案をアメリカが受け入れる事になり、これらの問題などを解決し、協定調印が決定した。

そして、昭和29年(1954年)3月8日、このMSA援助のほかに農産物購入、経済措置、



シューターに学ぶ

技と心

日本にはトイガンを使った射撃競技は数多く存在する。
今回はその中でも代表的な
JSC、JANPS、UNLIMITED、APSという4つの競技の
トップシューターたちに競技の魅力と技の一端を見せてもらい、
さらに、日米で活躍してきたトップシューターたちの
「ここまで」と「今」を紹介したい。
シューターたちの姿勢や技を通して、
我々を魅了させるシューティング競技に目を向けてみよう!

PRESENTER: マック堺

究極の速さを競う現代の早撃ち競技

「ジャパンスティールチャレンジ」

その早撃ち競技で幾度となく優勝を繰り返している

絶対王者に聞くJSCの魅力と攻略法&カスタマイズ。

JSC公式HP <http://www.steelchallenge.net>

年に1度開催されるスピードシューティングの日本一を決める大会「Japan Steel Challenge (以下JSC)」の究極のスピードを求める大会において幾度となく優勝しているツワモノがMACH SAKAIこと堺達也氏である。ここ数年は向かうところ敵なしの状態である。2012年から今年まで5連覇を達成している日本最強のスピードシューターだ。強さに迫るため、その足跡を含めてハナシを聞いてみた。

——シューティングをはじめたキッカケはなんだったのでしょうか？

マック 元々はサバイバルゲームをやっていたんですけど、一緒にやっていた仲間が辞めてしまったのをキッカケに、何か違う遊びがないかと探していた時に出会ったのがスピードシューティングでした。コンバットマガジンのKEN NOZAWAさんの記事などを読んで、必要な道具を揃えはじめたので

が、当然ながら簡単には行きませんでした。今なら判らない事はネットで検索すれば出てきますし、動画も山ほどあります。しかし、当初は誌面で紹介されている記事を読むか、シューティングマッチに参加して経験者の人に教わる以外に方法がなかったんです。

——確かに当時は情報を得るとなるとその2つしかありませんでしたね。関東や関西に住んでいれば、マッチなどのイベントも多かったので情報を入手するのはラクでしたが、地方に住んでいた方はかなり苦労されたと聞いています。

マック 当時は地方に住んでいたのが大変でした。上手くなりたくて、とにかく練習したりマッチに参加していました。回数をこなしていくうちに少しずつ上位に入賞出来るようになっていったのを覚えています。そういった時にKENさんに実際にお会いする機会に恵まれて、一緒にお仕事するようになり、

それが縁でUS Steel Challengeに出場出来る事になりました。はじめて行ったのは1997年で、その後、数年空いて、2000年から再び挑戦するようになります。

——そして2004年に優勝するワケですね。それまでも2位が2回あったのもあって、仲間内ではいずれは優勝するだろうと話題になっていました。サカイさんのスタイルとして特徴的なものが、速くてミスが少ないシューティングじゃないかと思うのですがいかがでしょう。

マック いまは参加されていないんですけど、以前名古屋にシミズさんというメチャメチャ速い選手がいたんです。彼の撃ち方はボクと真逆で、速さを突き詰めていくというものでした。とにかく速いんですけど、ミスも多くて良い時と悪い時の波が激しかったんです。モチロン、それでも速いんですけどね(笑) これに関しては、いまだにどち



MACH'S GUN

ベースとなるのは東京マルイのHi-CAPA4.3。ブリーチを軽いモノに交換するとノンHOPバレルの組み込み、ガスカットといった内部をカスタム。外観についてはスライドを短くカットし、先端部分でバレルユニットを固定。先の部分にコンペンセーターを取り付け。サムセイフティやグリップセイフティを5.1のモノと交換。パテを使って、自分の指にしっかりなじむようグリップを調整するスタイルもお馴染みだ。

らが良いのかは判りませんが、ボクは速さではなく正確さを求めるスタイルを目指しました。アメリカでは、シミズさんのようなスタイルの選手が多く、実際にそういった選手の方が上位に入賞しているんです。

——サカイさんは速さを追求するスタイルを目指そうとは思わなかったんですか？

マック ボクの場合、ただスピードを追求するだけでなく正確性も追い求めたいと考えています。そうすると、必然的に今のスタイルになりました。とはいえ、速さを追求する事自体はスキなので、その練習もやっています。

——サカイさんといえばJSCというイメージが強いですが、他のマッチにも興味がありますか？

マック モチロンありますし、時間の許す限り参加しています。とはいえ、時間には限りがありますし、体力的にもキツくなってきました。なので、一番

性に合っているJSCに重点を置いているんです。

——30代、40代以上の人がはじめてたりするのは可能ですか？

マック 全く問題ないと思います。早撃ち競技とはいっても、肉体的限界ギリギリのところで作るスポーツではありません。もし、これが陸上の短距離走で上位を目指すというのであれば絶対にオススメはしませんが、そこまで体力を求められる競技ではないので、30代や40代、50代の方でも安心して参加いただけます。

——サカイさんがそこまでハマったJSCの魅力というのはどういったところでしょうか？

マック 色々あると思いますが、一番は限界がないところじゃないでしょうか。APSやプレートマッチというのは時間制限があって、その中でいかにミスなく撃つかというのですが、JSCの場合は上限が決まっていないので、

限りなく速さを追い求める
ことが出来る！
魅力の尽きない競技

撃とうと思えばいくらかでも速く撃てる可能性を秘めています。限りなく速さを追い求める。これがボクにとってのJSCの魅力の一つなんです。

——サカイさんは積極的にネット配信を行っていますが、どのような目的があるのでしょうか？

マック 一番の理由はシューティングマッチを一般の人たちに知ってもらい



2012年から5連覇を達成しているサカイ選手のシューティングは、他の選手とは別次元である。パッと見には決して速くは見えないのに速いというのがサカイ選手の特徴なのだ。これは武道の達人の動きが緩慢に見える事にも通ずるかもしれない。



トップ選手たちは、ランダムに並べられたスティールターゲットを驚異的な速さでヒットしていく。実際に準拠したハンドガンであればオートでもリボルバでも参加はOK。カテゴリの違いはあれど、皆同じ土俵の上で戦う。